

●定住促進●

就農者育成への交付金活用で
定住の促進を

東京都八丈町産業観光課



◆八丈島の農業の概要と課題

八丈島は東京から南へ二八七キロメートルに位置し、面積約七〇平方キロメートルのひょうたん形をした島である。気候は黒潮暖流の影響を受けた海洋性気候で、季節を通じて多湿で雨が多い。

八丈町の農林業の生産額は約一九億円（平成二四年）で、そのうち約一三億円が八丈島の基幹産業となっている切り葉の出荷によるものである。この切り葉の生産額の中で、町の木に指定されているフェニックス・ロベレニー（以下、ロベ）の生産額は約一〇億円を占めており、国内生産量の約九割が八丈島産のものである。ロベのほかにもレザーファン（以下、レザー）やルスカスなどの切り葉も出荷している。

花き園芸が盛んな八丈島の課題のひとつとして、農家の高齢化があげられる。昨今、全国的に少子高齢化が叫ばれ

ているが、八丈島においても同様で、昭和二五年に約一万三〇〇〇人いた人口は、現在八〇〇〇人を下回るまで減少した。高齢人口割合は約四〇パーセントで、農家数も高齢化により年々減り続け、島の農業にとって新規就農者を確保していくことが急務となっている。

このほか、周囲を海に囲まれた島であるが故の自然災害への対策（対応）も課題である。台風の通路に位置しているため、秋の台風や春先の低気圧の発生時期には、風害と、風で巻き上げられた海水による塩害により、農業作物に多大な被害を受ける。これら自然災害を防ぐために、町では国や都の補助を受けながら、栽培施設の整備を行ってきたが、まだ施設化されていない圃場^{ほじょう}もあり、今後関係機関の協力を得ながら施設整備を行っていく必要がある。

◆八丈町農業担い手育成研修センターを活用した就農者の育成

八丈町では、これらの課題を克服するために平成二〇年度に東京都で初めてとなる「八丈町農業担い手育成研修センター」を開設し、八丈町農業担い手育成研修センター事業をスタートさせた。耐風強化型パイプハウスを二〇棟（計三三四〇平方メートル）整備、一期生として三名の研修生が入所した。研修期間は五年



研修の様様。右上より時計まわりに、ロベ苗植付け、島外視察（大田市場）、レーザー改植、ルスカス植付け。

間で主にルスカス、レーザー、あしたばの栽培についての研修を行った。研修生には一人当たり三棟のハウスが割り当てられ、入所して最初の二年間は先進農家が指導員となり、栽

培方法などを教わる。その後の三年間は教わった知識を活かし、実践的な栽培を行いながら自分が営農するための土地を探し、施設整備を行うなどの就農準備期間となっている。

一期生は平成二五年三月に無事卒業を迎えた。三名のうち二名が東京都の山村・離島振興施設整備事業を利用してハウスを整備し、八丈町で新たな農業の担い手として就農することとなった。町では同年度に、同整備事業を活用し、研修センター内にさらに六棟のハウスを増設。同年四月から二期生として新たに三名の研修生が入所した。

一人五棟のハウスを担当し、研修期間は四年間。研修科目としてルスカス、レーザー、ロベの三品種の栽培方法などについて学んでいるところである。離島活性化交付金は、都の補助の対象となっていない研修センター内の整備賃金、苗代、肥料・農薬代および研修生の島外視察費などに活用し、事業の推進につなげている。

現在、三名のうち二名の研修生は研修二年目でハウスを整備する土地を見つけ、平成二七年度には同整備事業を利用してハウスを整備する予定となっている。

◆事業二期目に入り、見えてきた課題

八丈町で農業担い手育成研修センターを整備したことにより、着実に新規就農者が育成されているが、さらに検討



新設した耐風強化型パイプハウス。



小型建機 3t 未満資格取得にむけた特別講義。

しなければならぬ点も見えてきた。

一つめとして現在の研修センターへの受け入れ態勢では島外への就農希望者に島に来てもらい、島で就農してもらうことが容易ではないということがあげられる。その理由は、島外者を受け入れるための住宅を事前に準備しておくことが難しいからである。また、島外では「農業Ⅱ野菜栽培」という認識が一般的で、花き園芸という農業の特殊性もあり、島外者の受け入れ難につながっている。

二つめは研修期間が長いこと。新規就農者を育成するスピードが遅くなってしまうのである。研修期間を短縮し、多くの新規就農者を育成していきたいところではあるが、八丈町では研修生に対する生活費などの補助がない。研修生はセンター内の作物を出荷することにより収入を得て、

生活費やハウスを整備するときの資金を稼ぐのである。そのため、研修期間を短縮すると、自分のハウスを整備するまでの準備期間を充分に取れなくなってしまうのである。

その他にも、研修生の指導を先進農家に依頼しているが、その農家も研修生を指導しながら自らの農業経営も行わなければならないため、三期生以降の研修センターの指導員を確保していけるかなど懸案事項があげられる。

◆おわりに

上述のとおり改善しなければならない点もいくつかあげられるが、これからも活力ある八丈島の農業を継続していくために、離島活性化交付金をはじめとした各種補助金を活用しながら、これら問題点を解決し、島外からの就農希望者を受け入れられるようにしていきたいと考えている。町でも研修センターをさらに充実させるなど積極的に事業に取り組んでいくので、農業担い手育成研修センター事業を引き続き離島活性化事業に採択していただきたい。



平成25年度八丈島産業祭の様相。研修生が八丈島農業改良普及事業協議会長賞を受賞。